

J S A  
北海道支部ニュース  
(No. 317)

日本科学者会議北海道支部  
事務局 〒 001-0022  
札幌市北区北22条西2丁目1-2  
静麗荘32号室

振替 02740-1-6811  
TEL/FAX (011) 707-2299  
Eメール jsa-hokkaido@mc6.sings.jp

北海道支部 ホームページ: <http://www.jsa.gr.jp/hokkaido/>  
JSA本部 ホームページ : <http://www.jsa.gr.jp>

2010年度の年頭にあたって (山田定市) .....	1
2010年度北海道科学シンポジウム参加報告 (加味根あかり) .....	2
定年退職される会員の皆様 .....	3
科学談話室 (後藤美智子) .....	4

## 2010年の年頭にあたって

日本科学者会議北海道支部  
代表幹事 山田 定市

明けましておめでとうございます。

世界的な経済危機とともに、わが国においても政治と経済において大きな変化が起きており、私たちの生活と労働が破壊されつつあります。

このような中でJ S A北海道支部においても、例年開催してきた北海道科学シンポジウムにおいて、昨年は『北海道民の〈働かせかた〉』を主題とする市民公開シンポジウムを開催し、労働問題研究者、労働界代表、医療関係者、大学職員などの参加のもとに、市民を交えて熱心な討議を行いました。無論、この主題はJ S A北海道支部としても引き続く研究課題として深めることが必要であると思います。

また、科学シンポジウムの一般研究の部では、昨年に引き続いて多くの若手の研究者が報告を携えて参加し、その中から優れた研究に対して研究奨励賞を授与することができたことは、若手研究者の養成を社会的役割の一つとしているJ S A支部として貴重な成果であるといえます。

しかし、反面では科学・技術政策や教育政策が大学・試験研究機関の社会的役割を侵害する方向で強行されつつあることも見逃せません。

昨今の情勢変化のもとで、新自由主義の政策がその自己破産ともいうべき事態と国民の厳しい批判にさらされていることは否定すべくもありませんが、大学・試験研究機関に対する新自由主義的政策はむしろこれから「本番」という状態にあり、その具体的政策が今後強行されようとしています。

この結果、「科学の自主的・民主的発展（日本科学者会議会則第2条）」がますます軽視されつつあるのみならず、科学技術基本法に明記されている“研究の創造性”すらないがしろにされようとしています。

このような中で大学・試験研究機関の独立行政法人化などに対して、あらためて厳しい検証が求められているのではないのでしょうか。

## 2009年度北海道科学シンポジウム参加報告

今回は農学部の先生から科学シンポジウムの講演依頼をいただき、急遽「ニホンツキノワグマにおける冬眼前の脂肪蓄積メカニズムとその役割」という演題で発表することが決まりました。初参加だったため、シンポジウムの雰囲気やどのような分野の方々が聞きに来るのか想像もつきませんでした。とにかく分野の異なる人が聞いてもわかるような発表内容にしよう心掛けました。特に、文字ではなくできるだけイラストで視覚的に理解できるようにスライドを作成したつもりです。実際に発表を聞いた方がどれくらい理解できたのかはわかりませんが、ありがたいことに奨励賞をいただくことができとても嬉しく思います。

私の研究対象はツキノワグマであり、近年人里への出没がニュースで報道される機会が増え、人との軋轢問題が注目されています。土地開発などにより動物達の生息環境が縮小・断片化し、人と動物が接触する機会が増えている今、人と動物が持続的に共存できる環境を作ることが非常に重要な課題となっています。クマは生態系の頂点に立つ動物（アンブレラ種）であり、クマの生育できる環境を保護することは、その傘下にある他の種の生育をも保全し、生物の多様性を保つことにつながります。この観点から、より多くの人々にツキノワグマの生態について知ってもらい、理解してもらう必要があります。今回の発表を通じて、意外に知られていないツキノワグマの特殊な生態について少しでも知っていただき、興味を持っていただけたら嬉しく思います。

発表会当日はやや参加人数が少なく残念でしたが、全く異なる分野の研究について聞く機会を得られたことはとても新鮮でした。普段であれば、研究室内であれ、学会であれ、同じ専門分野の研究者同士でディスカッションをするのがほとんどであり、ある意味では視野が狭まっているように思います。純粋な探究心を追求することも大切ですが、研究者は得られた結果を社会に還元するという重要な責務を負っていると思います。専門家の中で常識であっても、一般の人たちに理解されなければ、いくら世紀の大発見でも社会の中で役立てることはできません。

今回の科学シンポジウムで様々な分野の発表を聞き、改めて人にわかりやすく伝えることの大切さを痛感しました。異分野の研究者同士がお互いの研究内容に触れ、お互いに刺激し合い、視野を広げるといった機会はとても貴重であり、今後さらに科学者会議が発展し、若手研究者の交流もさらに深まることを期待しています。

(奨励賞受賞者：獣医学研究科生態学教室博士課程4年 加味根あかり)



## 定年退職される会員の皆さま 会員の継続を是非お願い致します

北海道支部事務局長 江見清次郎

今年度末で定年退職を迎えられる会員の皆さま、どうもお疲れさまでした。これまで日本科学者会議の会員として、何かとお世話になったことに対して感謝申し上げます。

退職後も会員として継続して活動をしていただきますようお願い申し上げます。現在科学者会議は財政的に厳しい状況にありますが、会員を継続して頂くことで、会の財政基盤を安定させ、ひいては科学者運動の発展にもつながります。

<班に所属している会員の方で継続していただける場合>

- 一般的に個人会員となり、「日本の科学者」や「支部ニュース」などを直接支部よりお送りする事になります。
- 個人会員になっても、支部幹事や大会代議員になることができます。
- 札幌には、退職した会員を中心にした「第3水曜の会」という集まりもございます。

班に所属している方は、班の世話人あるいは支部事務所（本「支部ニュース」1ページをご参照ください）まで、継続の有無と、継続していただける場合は、新しい連絡先をお知らせ下さい。

なお、特別会費制度（失職、傷病等の特別に困難な事態に至った会員の負担軽減のため、申請に基づいて、会費を一般会費の半額に減額することができる制度）もありますので、会費の納入が困難な場合、利用することも可能です。

## 会費納入のお願い

現在、2010年度後期分の会費納入をお願いしております。まだ未納の方は早めの納入をお願いします。また、今年度前期および過年度会費未納の方は至急納入させるようお願いいたします。

(支部財政担当幹事)

## 【科学談話室】

### 銭函海岸でアセスを受けるキセワタとは？（後篇）

第3水曜の会 後藤美智子

前回に続いて“キセワタ追跡記”。次に「北隆館」の『牧野図鑑』の系統に移る。

[Ⅲ] 「和名は“着せ綿”で花の上に白い毛があるためらしい」と牧野富太郎博士。「きせわた」の原線画、また後世の彩色画、写真像を眺めると、淡紅色の唇形の花の群がりにはどことなく愛嬌を感じる。

最初の㊦『牧野日本植物図鑑』（1940年）は復刻版で見ることができた。当時「きせわた」はくちびる（ばな）科に分類され「山地に生ずる多年草にて…」という簡潔な記述が冒頭にある。

牧野博士は最晩年期に前川文夫・原寛・津山尚の「助力を得て」『大增補版』（1956年、序文は「昭和30年師走の日」付）を完成し、翌1957年に95歳の生涯を閉じた。間もなくして上記三博士による編集・補遺により口語体文の①『牧野新日本植物図鑑』（1961年）が登場した。（我が家唯一の所有はこの最終の20版（1970年）で、家人の若き頃からの“愛蔵書”である）「きせわた」はしそ科として分類されている。

その冒頭の分布記述は以下のように㊦より豊かになっている。「東アジアの温帯に広く分布し、山地や丘陵地の草原に生える多年草である」。要するに牧野博士はキセワタの日本国内分布に関する記載は一切していないといえよう。

この分布記述は「北隆館」のそれ以降の牧野の基本系統、すなわち『原色版』（1982）、『改訂増補版』（1989）、『改訂版原色』（1996）、そして『新訂牧野新日本植物図鑑』（コンパクト版Ⅰ～Ⅲ、2000年初版）に至るまで一貫して変わっていない。

ところが①より半世紀を経た2008年に至ってキセワタ分布記述は大きく変更されていたのである。㊦『新牧野日本植物図鑑』（2008年11月初版）によると「北東アジア冷温帯に」分布して、しかも「北海道・本州・四国・九州…」となっていて、現代の他の大手出版社の図鑑とよく似た内容に一変しているのだ。以上が牧野博士の名を冠した「北隆館」系統の図鑑の流れである。

(前篇からここまでのまとめ)

現在キセワタの北海道分布に関しては、定評あるこれまでの「道内出版系」と「全国大手出版系」との間には明らかに“対立”がある。道内系が決して「北海道にあるよ」と言わないのに、全国系は「ある、ある」と大合唱する。これはおかしくないか？

[IV] しかし本当に奇ッ怪な話になってくるのは、これから先だ。

別の事情から「モミジバキセワタ」という別種の帰化植物(1975年銭函で発見)のことを知りたくて、私は北大の総合博物館の高橋英樹先生に問い合わせた。その際「キセワタの道内標本がある」というお話に驚き、早速お訪ねすることになった。

先生のお力添えで、キセワタの実物に初めて対面すべく、植物標本室に入った。示された標本はまさしくキセワタ。それもセピアな色が漂う明治時代のもの…。

2点は札幌採集(1882年)(1890年)、残り1点は湯の川(1916年)であった。約120~130年

前の“超稀少な証拠物”だけでは、道内の図鑑を執筆された先生方は、どなたも道内における生育を認められなかったのである。いや、道内でのキセワタの生育を認めた方が、ただ一人おられたのである。

[V] 万万が一、北海道のどこかの山地草原で、ひっそりとキセワタが愛らしい花を咲かせていたとしても、何でよりもよってこの銭函海岸砂丘地帯で、風力会社の環境アセスの網に引っ掛からなければならないの？私の素朴なギモンは膨らむ一方だ。

コンサルタント会社は、アセス方法書で「重要種」として植物6種を絞り込んだ。前篇を繰り返すがハマハナヤスリ、イソスミレ、シラネアオイ、チョウジソウ、エゾムグラ、そしてこのキセワタだ。当然業者側がこの選定に依拠したという文献、⑩『北海道レッドデータブック』(2001年3月)に注目することになる。道のホームページでは確かにキセワタは希少種(R①ab)になっている。今までの流れからしてどうもヘンだ。(R)という限りは、現在道内で、誰か彼かがどこかで生育を確認し、証拠写真の一枚も撮ってなくてはネ…。

では環境庁(2000年)RDBはどうなっているのだ？全国的カテゴリー判定では「絶滅危惧Ⅱ類(VU)」のキセワタだが、道内で(R)ならば当然、都道府県別分布情報の北海道ランクは○(ある)に決まっているよネと思いつつ、RDB 8(2000年初版の06年版)を見て、オヤオヤ…。なんと北海道は空白なのだ。○でも△(現状不明)でも、そして×(絶滅)でもない。つまり北海道にはもともとから生育していないのだ。

さらに⑪「矢原徹一監修『絶滅危惧植物図鑑レッドデータプランツ』」(山と溪谷社、2003年)を入手して調べたところ、村田源氏により初めて「(キセワタは)本州、四国、九州、アジア大陸に広く分布する」という(私としては納得のいく)解説が明示されていたのである。

しかしながらここで最大の疑問が生じてくる。同じ2000年の作成であるのに、キセワタに関わる北海道と環境庁のRDBの大いなる食い違いは何なのだ。図鑑版での道内系と全国系の“対立関係”がもの見事に逆転しているではないか。

ここまでの事実関係は、前篇投稿の段階ですでに把握され、私の疑問とともに後篇で論じ

る予定になっていた部分である。

[VI] 私はキセワタをめぐる国と道との奇妙奇天烈な“逆転現象”が気になって仕方がなかった。そこで小樽市博物館に出向き、道のRDBの実物を閲覧させてもらった。植物を選定した検討委員の名前を知りたくて。委員の名前を見たときはアッと驚き、さらに「引用文献」及び「選定種の解説」の記載方法等を追う中で驚きは倍増した。これが12月18日のことである。

[VII] 翌日12月19日、風力事業者とPコンサルタント会社を東京から呼びつけ、小樽市内で「銭函海岸の自然を守る会」主催の環境アセスをめぐる質疑集会在持たれた。札幌市、石狩市、さらに遠方の後志地域からも今回の巨大風力発電事業に懸念を抱く人々が続々と詰めかけた。中には超低周波空気振動の被害の恐れを心配して駆け付けた手稲山口周辺の方たちもおられ、40人を超える集まりとなった。報道関係者も数社が取材にきた。

6名でやってきた事業者側はアセスの「中間調査結果概要」なるプリントを1枚配布した。植物相と群落の調査は昆虫類と同じく6月、8月の2回で終了していた。質疑の中で私はキセワタをめぐる一連のギモンにコンサルタント会社の担当A氏がどう対応・説明するのか、大いに注目していた。

以下、私の質問に対する最初のやり取りの概要である。

Q：銭函砂丘帯でキセワタは見つかりましたか？…A：ありませんでした。

Q：キセワタはなぜ最終段階の重要種6種のうちに入ったのですか？その選定基準は？…

A：道のRDBにより5万分の1・A4図面にチェックがかかっている種を抽出。必ずしも砂浜に生育する種を抽出したものではありません。

Q：道内の希少種(R)の植物は合計316種にものぼります。ここからキセワタを選出したことに関して、どなたか専門の方に意見を求めたりしましたか？…A：方法書は全く文献からのみで、専門家には相談しておりません。

どこか歯切れの悪い印象を受けて、私は今回のキセワタ追跡の要点を会場みなさんに語り、A氏には「120年以上も前の“キセワタの幽霊”を捜す(ふりをする)ような真似ごとをアセスに持ち込む“いいかげんさ”では信用できない」といった。

そして前日18日に知りえた事実を皆さんに告げた。つまり

- ・道のRDB検討委員・植物担当の責任者(当時某大学教授)と4人の委員のうち1人は、すでに倒産したT銀行所属の環境アセス専門研究所による刊行文献の著者らと同一人物であったこと。

- ・そしてこの文献こそが唯一、道内にキセワタが生育していると記載していること。

それに対するA氏の応答は一言。「キセワタは取り下げます」。その言い草には、これから重大な決定に関わる環境アセスに対する、担当者としての責任感や誠実さは微塵も感じられなかった。新たな怒りがわいてきた。キセワタと一緒に調査や風車工事そのものも取り下げてもらいたいものだ。

(後の反省) いや、キセワタにまで八つ当たりして申し訳ない。いまや絶滅危惧種にまで追

い込まれ、その上このような業界・学術界・さらには政界に潜む“面妖さ”にまで翻弄されてきたキセワタこそとても気の毒な存在なのではなかろうか。私の怒りはもっと深化しなければ……。

(追記)

翌日20日、彼らは小樽市のさる機関に、前日に配布した「概要」を裏付ける報告書を持ちこんだ。調査確認種数・植物79科356種(調査日6、8月の計8日間)、昆虫178科689種(同じく10日間)。

ちなみに小樽総合博物館とボランティアが5年がかりで調査・同定した種数は植物で約150種、昆虫で約200種(多数ある未同定のもの含まず)である。地元調査勢も真っ青になるほどだが、わずかな日数でこれだけの成果を上げる調査方法とはどんなものか、ぜひ知りたいものだ。

興味は尽きないけれども、ここに至ってはもうそんなことはどうでもいいことにしましょ。コンサルトさんは地元博物館のこれまでの調査結果をしっかりと裏付け、いや、それ以上の収穫をあげてくれたのだから。だって、この銭函海岸の生物多様性・自然度をグレードアップしてくれたのでしょ。ひょっとしたらこの豊かな自然を潰す事業計画は断念してくれるんじゃないかしら?などと業者に単純に期待をかけるのは、善良な市民の心。どうしてどうして。質疑集会の前日の18日には「ボーリングはしない」という以前の約束もどこ吹く風で、小樽土木現業所にボーリングの申請をしっかりと提出していましたよ。

“したたかな業者”とともに新年を迎えた。生態系の問題に加えて超低周波問題も浮上してきた。会員の諸先生にはご専門を通しての一層のお力添えをお願いする次第です。